

## 第 52 回車いす SIG 講習会 in 横浜に参加して

井澤 薫実

東京大学医学部附属病院 リハビリテーション科

### 1. はじめに

2025 年 5 月 24 日～25 日に横浜市スポーツ医科学センターで開催された「第 52 回車いす SIG 講習会 in 横浜」に参加させていただいた。脊髄損傷者と車いすの接点を入りに、シーティング技術や車いすの機能性等について、車いすに関する多くの知識を得ることができた。知識以上に、車いすを愛する皆様との出会いは何よりの喜びであった。

### 2. 私と車いす

私と車いすの出会いは大学 2 年生の時である。中高生時代に病気で歩行に障害が残り、身体を動かす機会が欲しくて社会人車いすバスケットボールチームの見学に行った。初めて競技用車いすに乗って、数年ぶりに風を切ったときの感動は今でも鮮明に覚えている。その後、日常用の車いすを作成し、2 本杖で歩ける範囲内の世界でしか生きてこなかった私の世界は驚くほど広がった。現在は、車いすを使いながらリハビリテーション科専門医を目指す専攻医として働いている。

私は街中や病院内で車いすを見つけると、どこのメーカーなのか、車種はなにか等とついつい目で追ってしまう。リハビリテーション科という特性上、車いすに関わる機会も多い。これまではただ車いすが好き、という気持ちでしかなかったが、リハビリテーション科専門医を目指している以上はきちんとした知識を身に付けて関わりたいと思うようになり、本講習会を受けることを決めた。

### 3. 医師と車いす

講習会は、車いすに関する知識のシャワーが降ってくるようであった。車いすの歴史や、材料に関すること、メンテナンスに関すること、姿勢保持機能、シーティングの知識、車いすにまつわる福祉制度な

ど、様々な視点から車いすについて学ぶことができた。同時に、様々な分野の知識すべてを一人で網羅することは困難であり、あらゆる職種との連携が必須であると痛感した。

多職種連携において、医師、特にリハビリテーション科医が果たすべき役割というのは何であろうか。現在の制度では医師の作成する書類が必須であるが、車いすに関して専門的な知識を持つ医師はわずかである。そのため、車いすの処方においては業者やセラピスト・義肢装具士等に任せきりになっている場面も少なくないと思われる。リハビリテーション科医は、一人ひとりの障害に関して機能回復や能力低下の最小化、予後予測といったリハビリテーション診断と治療を行い、どんな生活を目指すのか、阻害因子となっているのは何かを判断し、その上で必要なリハビリテーション支援を行う<sup>1)</sup>。したがって、車いすができることを把握し、それぞれの障害に対してどのような機能が必要なのかといった知識を持って診療にあたる必要がある。

### 4. 今後に向けて

私個人としては、車いすに乗ること自体が目的ではなく、車いすに乗って何をするかが大事だと思っている。車いすは、移動機能障害をもつ者にとって移動の自由を与える一方、不適切な車いすは褥瘡や二次的な運動器障害などの悪影響も及ぼす。車いすの処方を通じて、障害のある人々の活動を支援できるよう学び続けていきたい。

### 【参考文献】

- 1) 久保俊一：リハビリテーション医学・医療総論，久保俊一（編），リハビリテーション医学・医療コアテキスト，2 版，3-10，医学書院，2022